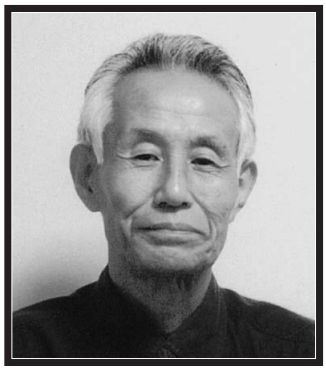
山田　卓先生を送る

野田　学

去る3月7日，プラネタリウムの解説，天文事業，著書などを通して，たくさんの人々をひきつけてこられた山田　卓先生が，大腸がんのためお亡くなりになった．70歳の誕生日まであと1週間という穏やかな日曜日の朝，眠るように静かに息をひきとられたとうかがった．敬愛してやまない先生の足跡を振り返りながら，そのご功績を偲びたいと思う．



山田　卓先生

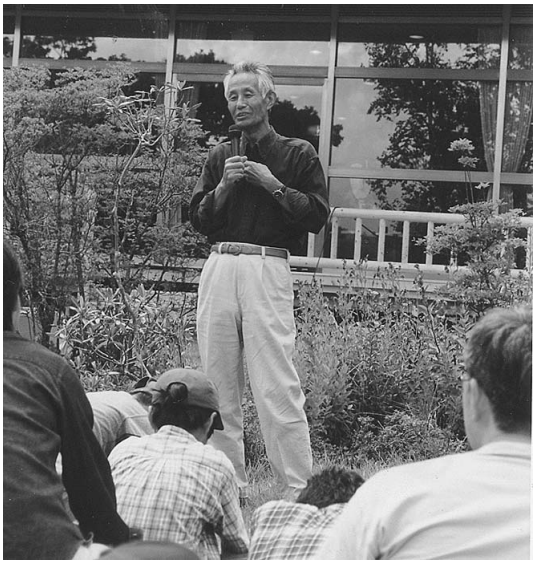
略　歴

1934年3月14日	愛知県名古屋市にて生まれる
1955年	愛知学芸大学数学科卒業 名古屋市立岩塚小学校，御剱小学校に勤務
1961年	(株)学窓社勤務（月刊誌・科学技術教育を創刊，編集）
1962年	名古屋市科学館に勤務
1992年	名古屋市科学館天文主幹を退職 名古屋市科学館企画調査委員
1993年	四日市市立博物館顧問 CBCクラブ文化賞受賞
1996年	日本プラネタリウム協会功労者表彰受賞
2002年	三重県立みえこどもの城　運営支援マネージャー
2004年	「科学技術普及啓発功績者」文部科学大臣賞受賞
2004年3月7日	逝去（69歳）

山田先生は，1955年（昭和30年）3月に愛知学芸大学数学科卒業後，6年間名古屋市内の小学校に勤務された．毎日独自のプリントをガリ版で刷り，子どもたちのやる気を巧みに引き出し，親御さんに「寝る時間になっても勉強ばかりして寝ないので困る」とうれしい苦情を言わしめたり，長年学校の先生を務められた奥様より訪ねてくる教え子の数が多かったというお話は，後年の先生の人柄を知るわれわれにとっては，いかにも山田先生らしいエピソードである．その後，東京での雑誌の編集業務を経て，1962年（昭和37年）より名古屋市科学館に勤務された．

プラネタリウムの解説は従来，講演調で行われていたが，名古屋市科学館開館と同時にプラネタリウムの解説に携わった先生は，独自の発想により，話し言葉による対話形式の解説を全国で初めて試みられた．この対話形式の生解説は，今では全国のプラネタリウムでごく当たり前に行われており，誰の発案ということが意識されないほどに定着しているが，親しみのあるわかりやすい生解説の原点は，先生の発案にある．

星空を観測する施設は，空のきれいな山間地に設置されるのが当然とされている．しかし，山田先生はこの常識もうちやぶり，交通の便の良い市街地にある名古屋市科学館の屋上に，当時一般観望用としては全国一の口径65 cm大反射望遠鏡を1985年に設置，プラネタリウムによる事前学習と望遠鏡による観測を一体化した天文教育を確立した．この大望遠鏡を使った観望会は，連日定員をオーバーするほどに活況を呈し，この成功例から大口径の公共天文台が全国に作られていったといっても過言ではないだろう．これら大望遠鏡の昼間の活用の場として，金星などの明るい星を見ることは今では珍しいものではないが，その原



おんたけ親子星座教室にて.

オーロラツアーを率いてカナダ・チャーチルへ.
凍てつくハドソン湾を歩く.

点は山田先生の発案による名古屋市科学館の「昼間の星を見る会」である.

また，1980年代まで，科学館などの施設で太陽黒点を映しだす場合，すりガラスの後ろから太陽像を照射する形式が主流であった．1987年，山田先生は名古屋市科学館の太陽展示を整備する際に，太陽専用望遠鏡でとらえた太陽像を真空ダクトと反射鏡を利用して，明るさを減衰させることなく展示フロアーに導き，直接照射・投影する方式を開発した．その像は現在でも日本最大の直径1.8 mであり，多くの見学者が訪れる人気展示である．生の太陽の光を手に取ることのできるユニークな，山田先生発案の直接照射・投影型の太陽望遠鏡は，名古屋市科学館の成功例から，国内だけでなくマレーシアなどの国外にも普及している.

ボランティア活動に関する足跡も忘れてはならない．山田先生は，天文クラブという同好会から，リーダー会をたちあげ，現在の教育ボランティア，天文指導者クラブ (ALC) を創設した．近年，公共施設におけるボランティアの活用は一般化しているが，ボランティアという言葉もよく知られていなかった30年前から，人材活用を行っていた．特に先生のユニークさは，能力を持ったマニア的な人材を集めて活用するということではなく,「無料奉仕活動ではなく，学費無料学習と考えて」と，活動できる人材を養成するという姿勢をとられたことである．その後ALCは年々会員数を増やし，現在では登録者200名を超えるボランティア組織に成長し，平成5年に名古屋市教育長，平成7年には環境庁長官より表彰されるなど，名古屋市科学館の一ボランティア組織ではなく，全国屈指のボランティア組織となっている．育成された個々の人材も，研究者の道につながった人からボランティア活動に生き甲斐を見いだした人まで，多方面で活躍している.

また，時間と情熱を注いで生み出された先生の著書は，星座の探し方・楽しみ方の入門書から双眼鏡・小型の望遠鏡で楽しむ天体ガイドブック，さらには世界的名著の翻訳など，変化の激しい出版界の中にあって息の長いベストセラーとして異彩を放っている．一般の人々のみならず，プラネタリウム関係者にも絶大な支持を得ており，ある種解説知識のバイブルとなっているくらい，信頼性，内容の豊富さにおいて高い評価を得ている.

記憶に新しいところでは，2000年の天文学会秋季年会の天文教育フォーラムでの「全国のプラネタリウムに天文学会から人を派遣して，天文学の

出前講座を」という先生の提言がもとになって，天文学会側から研究者を派遣する「講師派遣プロジェクト」が発足，実践されている．

本当に先生の業績は枚挙にいとまがないが，あまり知られていないように思われる．それは先生の一貫した姿勢によるものだろう．教員時代の話として，「教師がいろいろな教育事例を発表する研究会にいったことがあったけど，立派な発表をする人に限って教室では子どもがそっぽを向いていることがある．考えてみれば，本当に子どもと真正面に向き合っている教師なら，教師の研修会で発表する暇があれば，子どもと遊んでいる．」と言われていたことを思い出す．先生も常に目の前にいる人のことを考えておられたので，ご自分の発案を発表してオリジナリティーを主張するより，その間を惜しんで多くの人に星を知ることのすばらしさ，楽しさ，豊かさを語っておられた．お亡くなりになる数週間前に病室へ遊びにいった際に，望遠鏡がおいてあったのでお尋ねしたところ，動かぬ体を看護士さんたちに車いすに乗せてもらい，観望会を開いたとのことであった．見る影もなくお痩せになった身体にはさぞ寒風がしみたろうにと思いきや，「天気が良くて星が見られてね，本当に良かった」と語っておられた．目頭が熱くなる思いと同時に，この人としての品格が，多くの人をひきつけてやまなかったのだと改めて思い知らされた．

いささか私的なことで恐縮だが，私の人生の岐路にはいつも先生が立っておられた．研究者を続けるか，学芸員として名古屋市科学館に転身するか迷ったときにも「これからの時代は，プラネタリウムや教育施設には研究をバックボーンに持った人材が必要とされるだろう．受け売りでなく，ちゃんとした背景を持った人の言葉は，聞く人の心への届き方が違う．身分保障も不確かな何もない業界だけど，それは自分で切り開いていく楽しさでもあるんだよ．」として背中を押していただいた．先生の理念を体現できていない我が身が情けないが，「わかりやすいということは，内容の程度が低いということとは無関係．程度の低い内容でも難しく話すことはできるし，程度の高い内容をやさしく話すこともできる．程度の高い内容がわかるから人は面白いと感じる．」「人は誰でも，自分の心の中に自分の宇宙を持っている．心の中の宇宙は，自分が信じられる本当の宇宙でなくてはならない．」「正しい宇宙観から素敵な人生観を育て，楽しい人生を送ることが人間にとって最も大切であり，天文学は人間が生きるために必要な学問なのだ．」……時を経てなお輝きを増す先生の言葉にいつも励まされている．

天文学の知識の多寡で，われわれ教育畑の人間は，ともすると引け目を感じがちであるが，天文学者は研究のプロ，われわれは天文教育のプロという役割の違いがあるだけで，対等な立場で協力していけば良いという意識づけをし，自信をもたせてくれたのも山田先生であった．

先生のご遺志からご葬儀はなく，お別れの言葉を言わせてもらえなかったせいか，いまだに先生がもうおられないとの実感がわかない．当時はこのリアリティーのなさが辛かったが，今は逆にそれが何とはなしにありがたく感じている自分に気づき，これも先生の粋な計らいかと不思議な感じがしている．「人の意識というものは人間一人一人のからだというハードウエアがなくなっても，次の世代にソフトウエアとして生き続けていくものだよ」と先生はおっしゃっていた．多くの方の心の中に，先生のソフトウエアがある．私も例外ではない．だからだろうか，今でもふと先生にどこかでお会いできるような気がしてならない．